

PMDA 医療安全情報

(独)医薬品医療機器総合機構

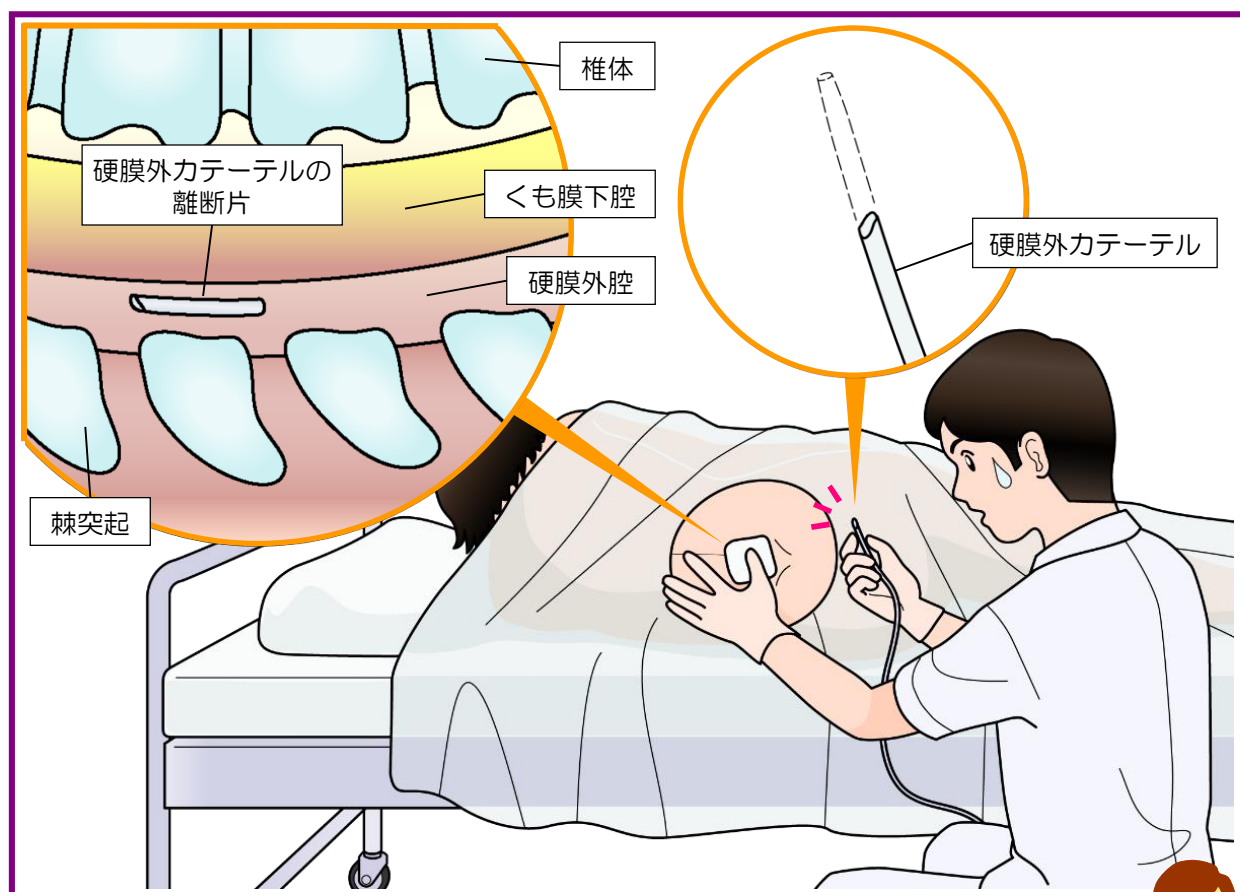
pmda No.41 2014年 1月

硬膜外カテーテル操作時の注意について

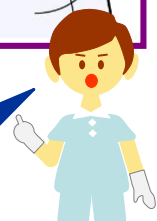
POINT 安全使用のために注意するポイント

(事例) 疼痛コントロールのため留置していた硬膜外カテーテルを抜去する際、カテーテルが離断し、離断片が体内に遺残してしまった。

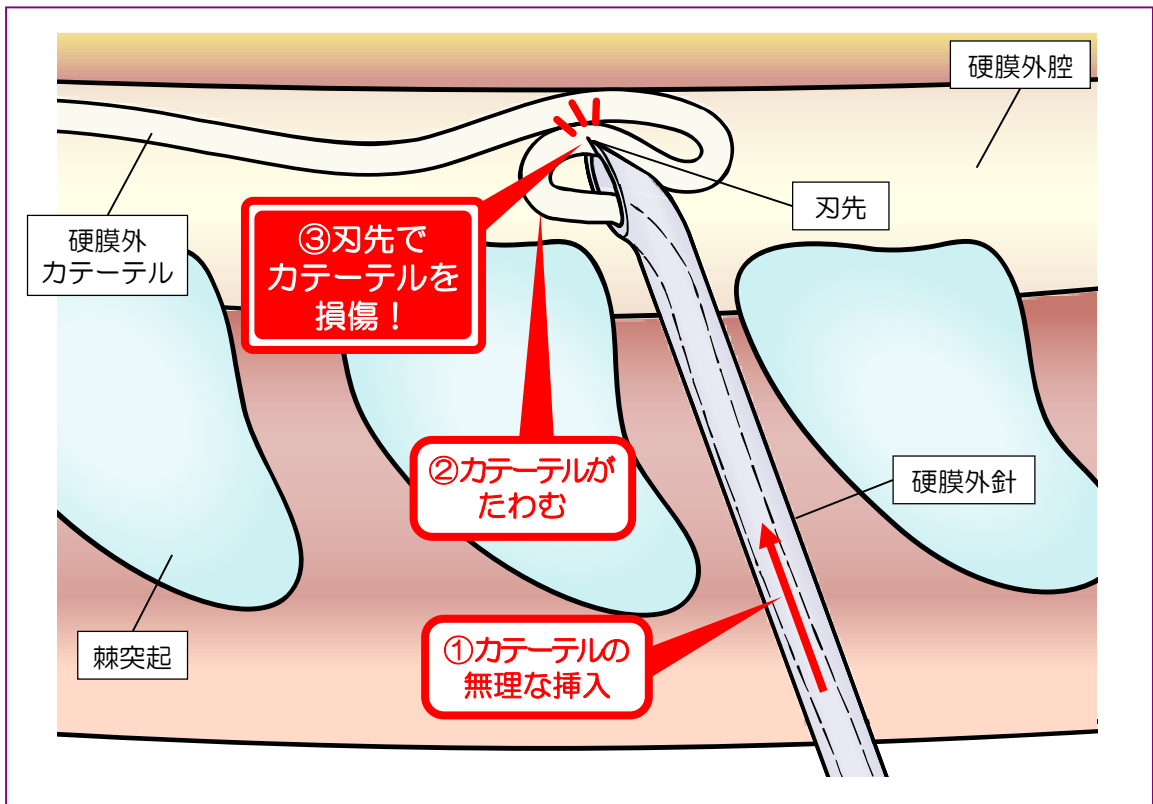
1 硬膜外カテーテル操作時の注意点



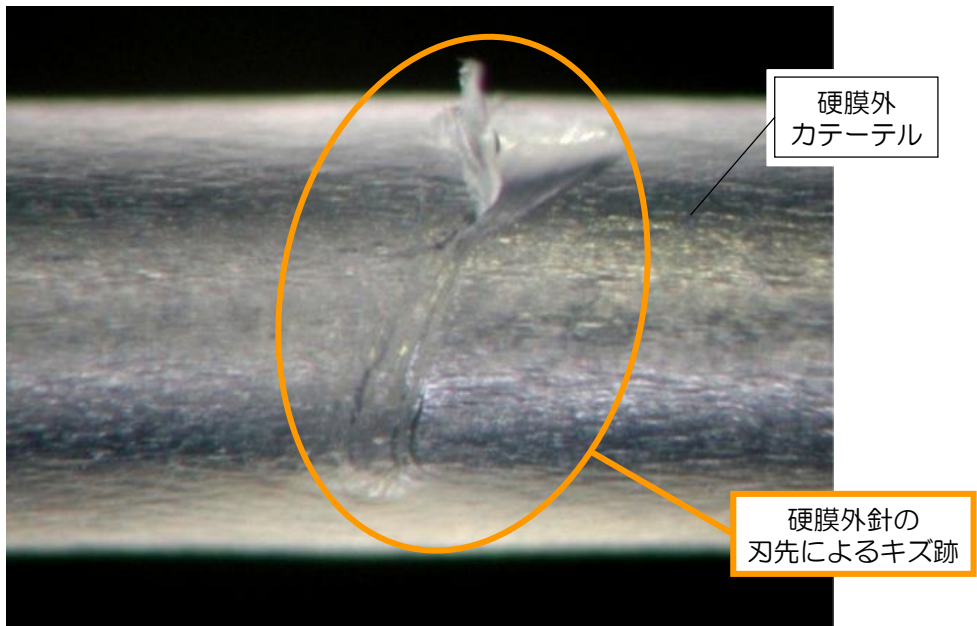
カテーテル挿入時にカテーテルを損傷していると、抜去時に離断してしまう可能性があります。



カテーテル損傷のメカニズム (1)



カテーテルの損傷状態

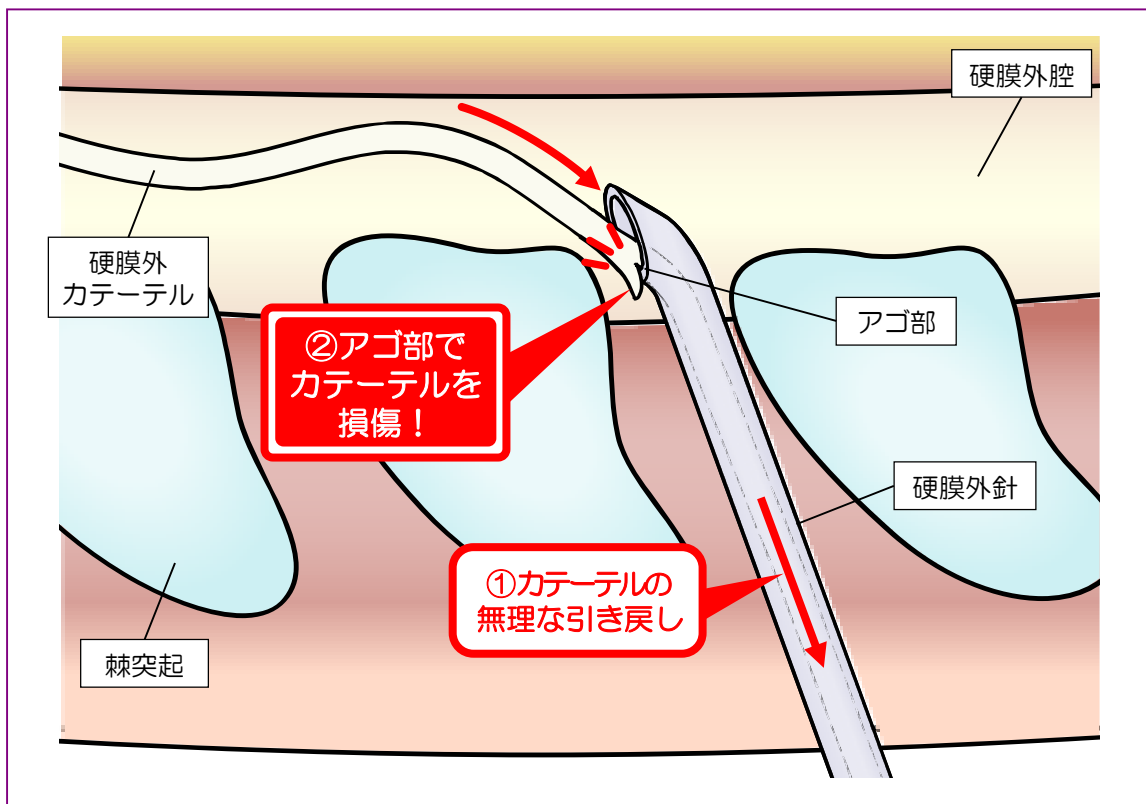


写真提供 (株)八光

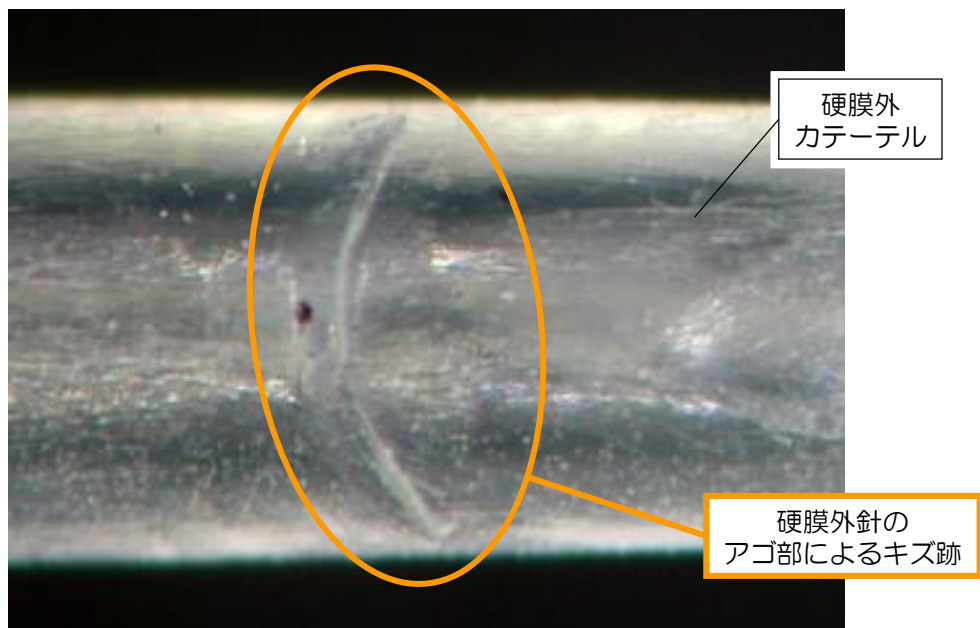
カテーテル挿入時に抵抗を感じた場合、無理に挿入しないように注意してください。硬膜外針でカテーテルを損傷させるおそれがあります。



カテーテル損傷のメカニズム (2)



カテーテルの損傷状態



写真提供 (株)八光

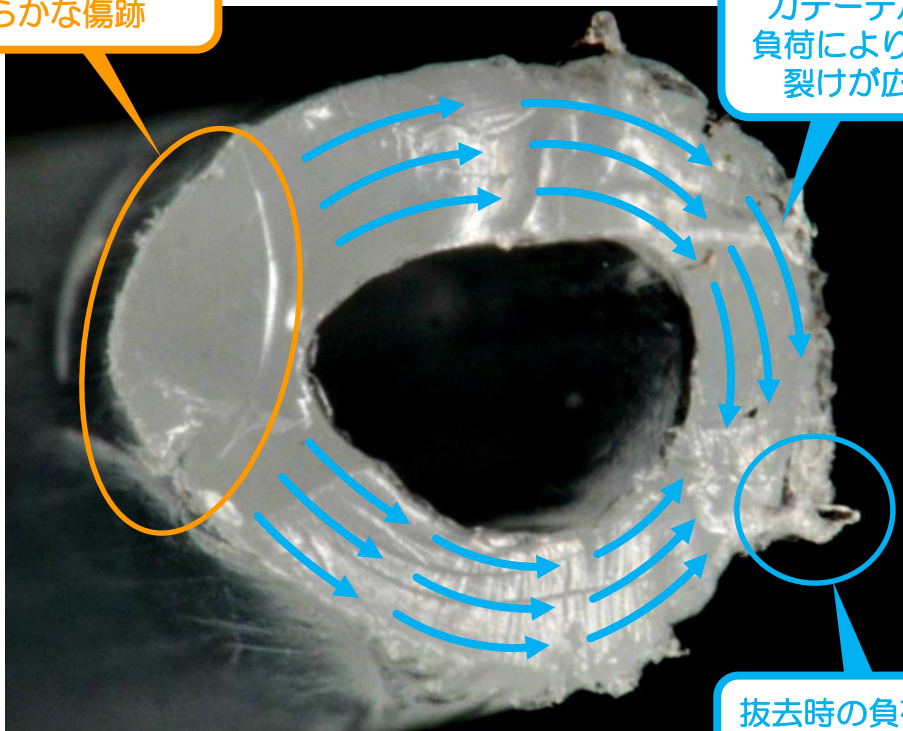
カテーテル挿入時に、カテーテルを無理に引き戻さないように注意してください。引き戻した際に硬膜外針でカテーテルを損傷させるおそれがあります。



硬膜外カテーテル離断面の一例

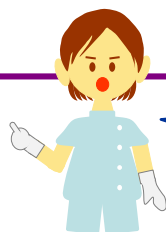
硬膜外針で切られた
滑らかな傷跡

カテーテルへの
負荷により徐々に
裂けが広がる



抜去時の負荷により
引きちぎれた跡

写真提供 (株)八光



写真のように、硬膜外針により損傷を受けたカテーテルには、硬膜外針で切られた滑らかな傷跡があります。カテーテル抜去時の負荷によりこの損傷部を起点にカテーテルが裂け、離断に至る場合があります。

本情報の留意点

- * このPMDA医療安全情報は、公益財団法人日本医療機能評価機構の医療事故情報収集等事業報告書及び薬事法に基づく副作用・不具合報告において収集された事例の中などから、独立行政法人医薬品医療機器総合機構が専門家の意見を参考に医薬品、医療機器の安全使用推進の観点から医療関係者により分かりやすい形で情報提供を行うものです。
- * この情報の作成に当たり、作成時における正確性については万全を期しておりますが、その内容を将来にわたり保証するものではありません。
- * この情報は、医療従事者の裁量を制限したり、医療従事者に義務や責任を課したりするものではなく、あくまで医療従事者に対し、医薬品、医療機器の安全使用の推進を支援する情報として作成したものです。